

シンポジウム「北海道草地研究の新たな挑戦」

はじめに—主催者あいさつ—

北海道草地研究会会長 (北海道農業研究センター) 山口秀和

北海道の飼料生産や草地の研究分野で、いろんな新しい取り組みが始まっています。それを紹介してもらい、今後の北海道の草地研究の取り組むべき課題を考えましょうという意図です。

1つ目は新しいマメ科牧草が話題です。

北海道の草地は大半が混播であります。混播草地の生産性をあげていくことは北海道の酪農にとって大きな課題かと思えます。マメ科牧草は栄養的あるいは収量への寄与は評価されているものの、割合の変動や持続性利用の困難さが指摘されています。こうした問題点の解決に新しいマメ科牧草のガレガレのように利用していけるかは、注目して良い課題であります。

2番目は、トウモロコシの省力的な栽培法が話題です。トウモロコシは高栄養・多収の飼料作物であります。多労であるため栽培面積は減少を続けています。最近では、畑作地帯の酪農だけでなく草地酪農地帯においても関心が高まっているときいています。北海道の飼料基盤を支えていくうえでトウモロコシの省力生産は実現していくべき課題であります。

3番目は、消費者を意識した有機畜産物の生産をめざした取り組みが話題です。有機農作物への関心が高まり、酪農での取り組みが始まっています。生産としてはわずかと考えられますが、消費者の要望に応じていく課題でもあり、研究サイドからどんな取り組みが必要になっているのでしょうか。

4番目は、水田でのエサの生産が話題です。事務局で相談していた時には「水田は草地研究会の対象か?」「いや対象は広く考えたほうがいいだろう。」という論議もしました。水田も飼料生産の場と考えれば研究会の範囲でしょう。補助金のサポートもあり本州では5千haを超す作付けがありますが、北海道は本州とは違って草地基盤に恵まれるという条件もあり、北海道ならではの位置づけ・取り組みもありうるかと思えます。

以上、4つの発表をいただいて質疑、論議を行います。トピック的にとりあげましたので、一つ一つの話は関連はありませんが、草地研究の新しい取り組みの出発となるような活発な議論をお願い致します。